

川柳の証

（行發日五十月一日起）號二第卷五十第 行發日五十月二年三十和昭 可認物便郵儲三第日三月三年三十正大

輯編★郎路生麻



2

號二第 卷五十第
行發日五十月每

菊正宗



店商納嘉本 株式會社

北涼 白蘭

典雅な日本座敷

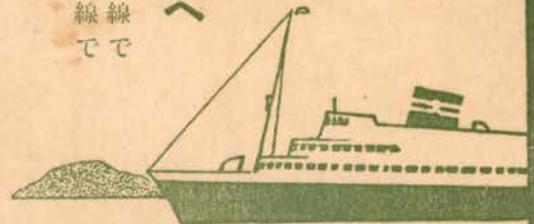
土佐堀船町



船の旅

温泉へ

別府線
勝浦線
で



大 阪 商 船

— 案内書進呈 —

大 阪 午後五時發
神 戶 同六時四〇發
和 歌 浦 同九時四〇發

(一日で那智、下口
遊覽 翌早朝歸着)

清 酒

白鶴



川柳雑誌

第 二 號 第 五 十 卷



事務室に於ける路主幹

川柳雑誌 二月號目次

表紙(文樂人形)……柴谷幸二郎

鷹治郎追慕川柳の夕

座談會……………(三)

司會者 麻生路郎

森ほのほ氏 水谷鮎美氏

森東魚氏 永田里十九氏

高橋かほる氏 中西おさむ氏

句……………(三)

廻り舞臺(五選) 紙治(鮎美選)

武玉川三篇研究(四)

梅本秋農屋……………(四)

春寒……………麻生葭乃……………(七)

田舎は情緒的である……………福田山雨柳……………(三)

川柳評釋百句

「武玉川三篇研究」を読む……………額原退藏……………(一〇)

不朽洞句抄……………麻生路郎……………(一)	十日過ぐ(句)……………高島米峰……………(八)	戦地より(句)……………後藤榆次……………(九)	近作柳塔……………麻生路郎選……………(六)	川柳集……………諸家……………(三)	丸帯……………池田可宵選……………(二四)	ゴムバンド……………阿部閑生選……………(二五)	各地柳壇……………社關係の人々……………(表三)	後記(表三)……………	川・協・の・頁……………	久良古稀祝賀と記念品……………(四)	俊翁……………(四)	柳人素描……………(四)	柳界展望……………(六)
------------------------	--------------------------	--------------------------	------------------------	--------------------	-----------------------	--------------------------	--------------------------	-------------	--------------	--------------------	------------	--------------	--------------

不朽洞句抄

麻生路郎

醉ふて来て
既に零時をすぎた水
思はざりき
娘が二十四にもなり
女には
もろきニツカーボツカー



中野ゆんか
おまかせの
志の年
会談座

會談座

公開して簡単な座談を開いた。

- 座談者 森 かのぼ氏
- 高橋 かのぼ氏
- 水谷 鮎美氏
- 永田 里十九氏
- 中西 おさむ氏
- 司會者 麻生 路郎

司「鴈治郎の事は、既に新聞雑誌で知られ過ぎてみえますが、又別な觀察で鴈治郎を語る事が出来やうかと考へます。どうか忌憚なく話し合つて下さい。(暫く無言)

東「(ほのほ氏に向つて) 兄さんは、いつか鴈治郎の悪口を云つて、鴈治郎から非難のネクタイピンを買つたつていふぢやないか」

ほ「さうだつたかなあ。然しあの時は鴈治郎より、もつと歌右衛門の方を悪く云つただよ」

東「それで、それで呉れたんだよ」(爆笑)

ほ「ネクタイピンは松竹の宣傳部が出したんだ。たしか明治四十三年頃鴈治郎と歌右衛門が梅忠をやつた時だつた。何しろ其頃の劇評と云へば辛辣に悪口さへ云へばいつかどどつて云ふ風潮があつたんだ」

鮎「私が鴈治郎を見たのは浪花座で歌右衛門との合同劇を見たのが初めてでした」

東「僕は明治四十五年一月の丑の年だつたと思ふが、學生の時分で、鴈治郎が天神様か何かの扮装で牛に乗つたつたのを見たのが初めだつたと思ふがね。其時栗山大膳なども演つてゐた。」

か「わたしのお母はんの父親は、鴈治郎に字を教へてました。まあ寺小屋のお師匠はんになりまんね」

東「鴈治郎の先生ですか」(笑聲)

お「その字の事ですが、僕の祖父が若かつた頃に、ある事から鴈治郎に知り合ひになりまして、父の代には極親しくしてゐました。その頃よく番頭さんを連れて來てましたので、私の家には始終に、父に贈られた非愛の紋入の茶碗だの、紙人だの、手拭などが澤山にありました。現在茶碗などは破れましたが手拭などは、家庭用の布巾などに使つてゐます。角帯などは今でも残つてゐます。いづれ私が締めやうと思つてゐるのですが、字は非常にうまかつたです、繪も上手でした。」

司「縁故の話はそれ位に止めて置きました。若し、鴈治郎が俳優にならなかつたとしたら、どう云ふ職業を選んだかと思ひになりますか。」

東「鴈治郎の改造かね」(笑聲)

鮎「館屋になつたでせう。鴈治郎館といつて」

司「南北氏に曰はすと、鴈治郎は體軀が大きくて、小廻りが利かぬから葬式の先共が一番いゝだろと云ふんですが」

東「そりや、ひどい、南北氏は自分の事を云つてるんぢやないかね」

ほ「まあ料理屋の亭主にもなつて趣味に芝居でもやつてるといふ風になりますか」

里「私は、七八つの時分から鴈治郎の芝居は見とりまんね。先刻、此所へ來とりました敏夫はうちの息子の友達だんね。どつちも兵隊検査で、二人共内種だんね」

東「里十九さんはそんな息子さんがあるんですか」

里「夕鐘君と、今から十八九年も前に中座へ鴈治郎の熊谷陣屋を見に行つたことがおます。花道の前にゐたんでよう判りませんが、幕前に急に舞台がシーンとしました。覗いて見ますと鴈が一人で床几に坐つてゐました。柀がはいる前から一人丈け頭張つてゐるのだすな、流石に偉いと感心しました。其のあとの卯三郎福助のやれ三味線の時の喧ましました」

ほ「これは死んだ勘彌から聞いた事ですが、鴈治郎は忠臣蔵はや、こしいから初から通つてたさうです。あんな通俗な演物でも決しておろそかにはせなかつたんですね」

氏(孫) 夫藏林さん(娘) 子芳村中たれき臨臨に夕の柳川



東「それから大向ふからの掛簾ですが東京と大阪とちがつてますね。東京ぢや「なりこまや」と短く云ひますが關西の方では「なありこまや」と云ふ風に云ひますね。田舎の人が東京へ來ると、みんな「たや〜」としか聞えないさうです。それに僕は芝居のいゝ所へ來ると大阪では「こたえらわ」と云つた人には驚いたね」

里「昨夜も歌舞伎へ行きましたら、中に一日本一」と云うた人がありました。然し、掛簾は矢張り、こういきまへんとあきまへんな「なありこまや」と(里十九氏得意の聲を張り上げてサンバルを示す)

司「では、時間もありませんので、これで座談会は閉會にいたします。(文責記者)



松坂俱樂部

あらゆる趣味のお稽古場

手はぎさか興義まで 氣軽く、樂しく、御上達

會員募集

- お稽古目
- 長唄
- 常盤
- 清元
- 小唄
- 鳴物
- 尺八
- 舞踊
- 謡曲
- 能樂
- 小鼓
- ピアノ
- 聲楽
- 日書
- 茶道
- 華道
- 洋裁
- 俳句
- 柳道
- 氣道
- 棋道
- 松坂レコード
- 吹込所

川柳講座
川柳雜誌主幹
麻生路郎先生
擔當

御申込
七階 松坂俱樂部
電話 三〇〇三番

松坂屋
大坂 日橋



武玉川三編研究 (十四)

梅 本 秋 の 屋
森 東 魚
蛭 子 省 二

(212) 去年のけふ逢ふたまゝなる紋所

秋の屋 去年の本願寺の報恩講に、あの娘の姿をみたのであるが、前の儘の小袖に、同じ紋章の附いてるのをみるこゝ、まだ縁談の口も無いのだ、なご、想像するであらう。此の娘は美貌でないらしい。

東 魚 前説に盡きるこ思ふ。

省 二 贊。『翠年のお講にはもう抱かせて來』の反對。

(213) 初風 廣い 通りを 横に 行

省 二 「初風」が句の艶を出して居る。「横」云つたのが「初」の字に對して感じをなす。

秋の屋 東京ならば凱旋道路といふ所であらうが「横に行く」したのは、實に際しい句である。

東 魚 眞正面を向いては、風當てが強く堪えられぬので、體を横向けにして大通りを行く。事實覚えのある事である。

(214) 三十に成ると女の世がすたる

省 二 「三十は男の花」に對し「三十小皺」云つて、女は眼尻に皺筋が出来て、聊か落花の姿を表はす。(諺語)

大辭典に「女の二十はチョト婆さん」云出て居る。呵々。
『美しい氣を捨る三十』(330)云か、『四十の妻のちんまりさねる』云淋しさを加へる。

秋の屋 女は三十、男は四十に成つてから、眞の男女であるこ思ふが、容色の方は既にすがれの花である。

東 魚 子供でもなければまだしも、普通、女も三十に成るこ、俄に老けるものである。但三十振袖、四十島田、吉田町といふ別世界はある。呵々。

(215) また 針指の 出来る 圍れ

秋の屋 圍女なご、いふものは、内職に裁縫をしたものであるから、針刺を屢造るかも知れないが、弟子を取つて裁縫の教授をするこ解せられる。

東 魚 さいう云ふ場合か、充分のみ込めない。

省 二 ？。妊娠出産の場合かなご考へてもみたが。

(216) 兩方の目のいそかしき中の町

省 二 「兩方の目」が様々だ。(一)遊子の兩眼が中の町の兩側に及ぶので忙しい。(二)兩側の引手茶屋の眼なのか。(三)遊子引手茶屋の兩方の目なのか。——(一)こ

(三)のうちこ思ふが。

秋の屋 吉原仲之町の中央に、多くの櫻樹を栽ゑるこ、花魁達はその左右兩側を道中するから、兩方をみる目が忙しいのであらうこ思ふ。

東 魚 兩側をキョロ／＼見廻はし乍ら行く場合、遊子の方の様に思はれる。

(217) 誓文を立る 若衆の 聲高く

秋の屋 相手が念者であるから、牛王寶印の裏面に起誓文を盡き、それを聲高らかに讀上るのであらう。

東 魚 若衆が聲高く誓を立てる所に、いこしさが溢れる。

省 二 眞劍さがある。——但し『若衆の起請一世にて濟』(武十七)

(218) 遊行の 札をさかさ 綻び

秋の屋 遊行の札を頂いたが、同じ信者が群衆雜沓する中で、着物の袖がいつか綻び、お札の紛失したのを捜索するこである。

東 魚 純朴を信者の、おろ／＼してゐるさま、綻びに哀れさがあり、可笑しさがある。

省 二 「綻び」により、いかに執心もお札を受けたか判る。遊行上人、遊行宗の名は遊行するが當住で、藤澤は隠居なりといふ。「遊行上人の配る札は一年中遣はずを正月十一日にくらがりへ入りて上人自身刷り置く事なり、上一枚へ板にておせば、下五六十枚へもうつるこなり」(遠碧軒記)。其札に六十萬人あるのは、六字名號一遍法、十界依正一遍體、萬行雜念一遍證、人中上々妙好華の頭字を採つたもの云ふ。

東 魚 金妙子に『手から手へ遊行の札のつかみ取』こ。人の手にしたものを奪つたらしく思はれる。「ほころび」の意味が判然とする。

(219) かはらの煙白髭へ行く

秋の屋 江戸時代の本所小梅村の瓦を焼く竈の煙が、向島の堤の白髭社の方へ、南風に靡いてゆく。

東魚 沿岸の風光が、瓦やく煙によつて、更に一段の趣を添へてゐる。

省 二 濁水であると言はれても、隅田川が都人士に與へる慰安は多大なものだ。況んや昔時に於てをや。江戸名所圖會を見るに、中之郷の「瓦師」の挿繪がある。中の郷から小梅界隈に製造所があつたもの、「飛んだ雨だミ瓦師は大騒ぎ」。此雨は其角のそれだ。又『定紋の今戸へ知れりい、暮し』は今戸の瓦師である。いづれにしても白髭の方向へ煙が流れてゆく一景は、愛すべきものであつたであらう。こんな句もある『瓦師の知つたふりする都鳥(武・八)』

(220) 木馬の側にかゝみ見て居る

秋の屋 武家の若殿なきが木馬に乗るのを、その従者が侍女が、側に蹲踞してみてゐる圖だ。

東魚 「か、み見てゐる」は、修辭が拙いと思ふ。但かゝんで監視してゐる處に、乳母さか侍女さかの忠實な姿を想ふ事は出来る。

省 二 確かに窮屈な調であるが、立つてゐてゐるでは、情味は乏しくなつてしまふ。

(221) 土器師ともに鶉を譽て居

省 二 『深草や若い女房の手が荒れて』(不斷櫻) 京深草の土器は日本山海名物圖會にもある通り「庭訓にも深草の土器師さあれば、久しき名物なる事知べし」である。又鶉の名所でもあつて、『鶉啼深草や子も土なぶり』(祥祥)。「深草の草にしみ入鶉かな(祇孝)。土器師がさにも鶉をほめるのは村自慢さして當然だ。

秋の屋 鶉の鳴音を賞讃して、籠に飼養するのは後世の事で、古歌にはその聲の哀れなのを、三十一文字に詠んだもの而已である。

東魚 土器師さいふものが、既にわびた風流なものに考へられるので、共に鶉を賞する事は、呑み込めるのであるが、餘り土地に縁の深いものを取揃へた作爲が、目立ち過ぎはせぬか。

省 二 深草は「昔より鶉の名所にして、聲は他境に勝れたり」(都名所圖會) 深草に鶉をよみ合せる事は、歌にその例が多い。

(222) にはたつみ夜も鳴鳥の水か、見

省 二 ？ 確心ある解がない。

秋の屋 「夜も鳴鳥」は何鳥であらう歟。或は山鳥の尾の鏡のこみ歟。この山鳥は夜中飛翔する時に、翼より火光を放つて某書にある。

東魚 前の句が鶉である爲か、何だか此の句は鶉のやうに思へる。片鶉なき、云つて、夫を戀ふ鶉を詠まれてある。「水か、み」に戀が、かゝつた気分が想像されると思ふ。

(223) 百日法花また杖まつく

省 二 他宗徒が一時法華宗を信仰して、病氣や心配事の祈禱をして貰ふを、「百日法華」といふ。『百日目妙でござる髪を剃り』。『妙法は百日でさへち、が出る』。『百日で味方につける八の巻』「杖をつく」で堀ノ内へでも參詣する。「他宗より妙にはまるは堀の内」。法華信心は旺むなものである。

秋の屋 病者が百日に限定して、日蓮宗の信者となり、漸く快癒したけれども、歩行するにはまだ杖を突くといふので、「また」は「未だ」である。

東魚 前説替。

武玉川前號正誤表

頁	段	行	誤	正
六	上	二	突天	炎天
六	上	廿二	有事	百事
六	上	廿二	手劍鉞	于劍鉞
七	上	九	武庫川	武玉川



のた
めに

妊娠としての大切な責任はカルシウムを補給して諸病を防ぎ、子宮の収縮を容易ならしめ「安産」へ導くことにあります。

片瀬醫學博士 推奨
片瀬醫學博士 監査



ブダカルシウム錠

大阪道修町 和田卯助商店

☆ 句集出版をいたし方

句集の自費出版希望をならせながら多忙で着手し、來年刊行の出版等本製・正校・刷印・纂編・は方いな來いさ下命用御。すまり計を宜便の一部一は又切一

不刊出版部 大正西成區 玉出本通三



近作柳樽

麻生路郎選



支那兵になる子が無くてもめてるた	愛媛縣 酒井 肱水	佛壇も横に積まれて古道具	大阪 關本 雅爾
やがて征く體を腕を湯で想ひ	同	飯台を踏台にして母の留守	同
信仰に凝つた若さを悲しまれ	同	鶏の聲に明るく隔離部屋	同
運命にまかす氣になり樂になり	同	時たがはずに花が咲きだし腹立たし	同
感情に走つた丈の損でなし	同	春淺し亡父の一番好きなき軸	同 近藤玉京子
突風のリレー帽子を人間に	大阪 米谷松太樓	思出の着物もまぜて襪襦を賣り	同
過去なきにふれず信じてゐる二人	同	汚す兒も無い朝晩の拭掃除	同
電話口お辭儀してゐる聲になり	同	形見着て町内會に座らされ	同
白足袋の汚れたままの嫁きおくれ	同	眼目と讀書向合ふ三等車	同 今治 長野 文庫
たんぜんさ炬燵で無事な三ヶ日	同	待合所無惨な本が二三冊	同
落泊の罷なり思ひ切れぬ髭	兵庫縣 酒井美知夫	鱈賣り露地を廻つて擔ぎ込み	同
癩癩の竈燐寸がくべられる	同	未だ若く北支へ渡る氣を起し	同
紙芝居お釣をわたす客が出來	同	やけ酒さ知らず女給の口が過ぎ	名古屋 鈴木 可香
正月が迫る餅屋の旋風機	同	子のさけを抜いてやつてる春の窓	同
初日の出ただ感激の鐵かぶ	朝鮮 弘津 慶一	隊長も子の萬歳へ返す禮	同
大望は北支の空を思ふ今日	同	留守番へ固く言はれた小鳥の餌	同
昔乍らに父むつり出迎へり	同	藥吞む手も細々さ病み上り	奈良縣 嶋田 翠峯
結局は金さ君さあ飲みたまへ	同	見込まれたのが糸はんを貰ひうけ	同



柳界展望

全國川柳界のこゝ、各地川柳人の一舉手一投足をこの展望欄ですぐわかる様にした。皆様の御通信を歓迎する。

催

- ▼川雜廣島支部昨月例會は廿八日廣鉄クラブに於て開催催され霞乃女史が出席した。
- ▼二月十一日 港區八條通の高野山で岡町支部會が開催催され霞乃女史が出席した。
- ▼一月廿七日 大鉄俱樂部で川雜大鉄局支部會が開催された。
- ▼二月二十日 午後七時から尼崎市衛生組合事務所で尼崎會が開かれた、路郎主幹出席。
- ▼犬山すげ等會では二月二日午後三時から舊正月川柳大會を犬山町の大口屋本店で開催された由。
- ▼川柳國松島新年會は一月廿三日午後二時から千年町ちどりに於て開かれた。
- ▼松坂俱樂部趣味道場の路郎川柳講座は二月六日と廿日に開講した。路郎主幹出席。
- ▼有恒俱樂部有恒川柳會では二月八日と廿二日開催された。路郎主幹出席。
- ▼加能川柳社(金澤)では二月十三日に紋二郎君の追悼會を開かれ席上から寄せ書をいただいた。

消息

▼二月中旬「ふあうすと」社(神戸)の紋太、素生、一狂城兒不二也、蘇堂君等は上京され京濱川柳吟社聯盟の歡



初詣で只息災を祈るのみ 同
 風呂に行く下駄は小さい女物 下田 多田市他樓
 流行歌消て軍歌に年は暮れ 同
 非常時に次ぎノ孝子出づるなり 同
 交番の机もバラが咲きはじめ 大阪竹内美津枝
 挨拶をして居る母のせなへ来る 同
 其れからは言つて呉れな目動き 同
 暴君に困る仔犬の首の紐 名古屋 平田 素天
 スカートの折目戀知る頃こなり 同
 干し傘が一丁飛んだ風が吹き 同
 召集令勝氣な妻をまごつかせ 大阪石田 沐天
 この伊勢屋だけは町内もて餘し 同
 國境を太根二つ流れ落ち 同
 酔ふた代價は廣告マッチ一つ 尼崎 酒井 斗風
 だらしなない男も想ひ酒をつぐ 同
 焼りんご食ふてつまらぬ夫婦なり 同
 「京の四季」を南地で弾いて貰ふ春 大阪古寺謙南坊
 二次會も豫算に入れて懐ろ手 同
 叱られた涙は膝で消えてゐる 同
 春らしい風に齒磨粉がこほれ 名古屋 水田 菜乃
 油繪の赤が淋しい遺作展 同
 座談會すつさくだけで窓を明け 同
 大阪へ長男までが行きたがり 大阪府 川村 觀月
 借金の家建つてゆく世こなりぬ 同

名優の科白もなしに五分間 同
 アマリリス甘い放送流れさう 豊中 金田 並木
 性格論なき話し淡き戀 同
 マスクだうがひだ風邪を引いてゐる 同
 酔つたのが歸つてしまひ火を埋め 谷 心府
 寒行は譽の家へ念を入れ 同
 冬の雨コートの色の鮮かさ 同
 こないだの禮を忘れた電話口 大阪 金井 申郎
 母さんも積木の嵩へ寄せつけず 同
 人間の世界は恐しねずみ取 同
 働けよ疲れよかくてさぐる夢 松本 小倉山 雅登
 いのだよ黙つて生きればそれでいゝ 同
 瘦せた頬叩くは春の風なるか 同
 年だけの後ろ姿でかへるなり 大阪府 西尾 栗
 霜やけの手に鋳入の腕時計 同
 ノックして驚ろかしたは給仕さん 同
 見送りの軍歌へあはず旅の人 大阪 小川 京詩
 双六のやうに皇軍攻めてゆき 同
 スル／＼ミ上る國旗へ捧け銃 同
 藥瓶貧乏の神に似た姿 長野 中村 猪郎
 添寝する子の足寒むししか抱く 同
 内職の福音保證金が要り 同
 神様神様女給の顔が十字架に見えました 大阪 泉 流葉
 初日の出今年の苦勞思ふまひ 同
 往診を乞ふ時熱は四十度 同
 い、月だ一度戻つて告げて出る 長野 林 幹

春寒 麻生葭乃

迎會にのぞまれた由。
 ▼櫻川不水君(下關)から一月廿三日午前〇時十五分我等の船徳壽丸は僚船景福丸と衝突し、十有五年の赫々たる歴史を残し、遂に關門海峡に淋しくも沈没しました幸ひ全員無事なるを得ましたが一瞬時の出来事として船内公用物品を初め書籍類其の他私用物の全部をなくしました。今の處蜂の巣をついた様で非常に混雑してゐます。云々の通信に接した。

何だつて、人間は歩くくんだらう。彼の人も、彼の人も、歩きたくて歩いてるんだらうかなア。
 ○ 猫が欠伸をした。

屋根のちよつばなに座つて、また、もう一篇欠伸をした。何を視てるんだらうなア。あの空つほな腦がうらやましければ、あんたも屋根へお上り。春の陽はまだ 寒む寒むこしてゐるけれど。

- ▼大西八歩君(不朽洞會員)は山陰方面へ商用で旅行され松江から頼信があつた。
- ▼高島玉兎朗君(東京)は感目になやまされてみられる山一日も早く御全快を祈る。
- ▼村松夢裡君(不朽洞會員)は四國方面へ商用で出張、高松から句信に接した。
- 船暈へ助けて欲しい聲をのみ
- ▼松本文太君(石川縣)は名譽の戦傷を受け一度退院されたが種々勤務に差支へレントゲン診療の結果盲貫破片創と判明、又右手骨折部凍痛のため再入院された由、一日も早やく快癒されんことを祈る。
- ▼福島葉留路君(廣島)は廣鉄局開催のスキー講習會へ指導員として派遣され、一月十六日は野原スキー場、廿日は備後三次の金尾原スキー場を経て各地に旅行され、二月六日腕山スキー場に遊ばれた由、スポーツマンには嚴寒も亦楽しみである。
- ▼蛭子省二君(朝鮮)は持病の服藥の故か腦が半分働か



馬鹿らしいとは思つても處世術 同

あんな酒飲めないわねこ皆飲み 同

薄情にすればお金はたまるもの 大阪 山本 葉光

家計簿へ女たるもの惨めなり 同

あきらめる事が愛ははまだ若し 同

戀に瘦せて夜行列車のけたたまし 下關 櫻川 不水

秋來るこきめて宮島通り過ぎ 同

工場の煙霞の中へ消え 同

入庫する途中もバスは稼がされ 尾崎 北川 春葉

父と寝て炬燵へ足の届かぬ子 同

幸福な一家芝居へ泣きに来る 同

計畫にかゝつてやるも社交術 廣島 福岡葉留路

張紙の次點候補が破れてる 同

新築が都市計畫の線に觸れ 同

病氣から髭生やてしる運轉手 大阪 山川 富士

我が髪を結ふて梳子は春になり 同

代を譲り巡拜出来る身にもなり 同

拾ひ屋のツト良心を取戻し 大阪 落合陽左右

一錢を露路でもめてる空びん屋 同

友達さはぐれつけ髭酔つてゐる 同

サクサク散歩もいゝな霜柱 豊中 橋本 和郎

感情に負け聖言に悔を持ち 同

さの顔もみな似合つてゐる戦闘帽 同

榮轉へ買ふたばかりの定期券 大阪 今井 菊路

町内に名譽の家が二軒出来 同

夏秋さ武運が續き迫る冬 兵庫 高峰 柳兒

妻も子も待つボーナスを淋しみぬ 同

瀧の音聞近に聞いて子をおろし 大阪 竹内 春坊

乗り過し氣まり悪いも通り越し 同

なけてやればすぐキャッチャーの型になり 布座 福井 尺翠

黒板を拭かされる子は美やまれ 同

改札へ来て犬ころは追出され 大阪 毛利 稔幸

遮断機へスピード落し倚つてゆき 同

ダットサンお客小さい人に見え 愛媛 米澤 曉明

戦功は胸一列に光るもの 同

よく續くものだ女の立話 大阪 富岡 巨人

人中に毛皮の女ツンミ居る 同

塹壕のタバコへ母のフト浮び 愛媛 岡田 浮草

君さ僕だけの街だミマントかけ 同

眼がさめてバットのからを引よせる 大阪 澤田 粒子

バスケットおろして女道をきき 同

知らざりき陸口の中へ這入つて來 同 畑田よし江

ず、書見も意に任かされぬ由、折角の御自愛を祈る。

▼山本葉光君(大阪)の義甥松本信男君は分隊長として

舊〇〇地點に於て勇壯な戦死をされた由、深く敬意と弔

意を表する次第である。猶一月廿九日大阪港に無言の凱

旋をされたとのこと。

▼石曾根民郎君(信州)から信州はすつかり雪の底で、

今年ハスキーの神宮大會が本郡の野澤にあるとの事、こ

志賀高原のスキー俱樂部もはきつてゐますとの事だ

より。

▼松倉白猿君(大阪)は大阪鉄工所各工場代表懇談會委

員に一七二票で當選されたとの事。

▼戸倉普天君(兵庫)は爾來東京と滿洲を往復して在宅

の暇もないとの事だが健康で御活躍は何よりも喜ばしい

▼小西小仁翁君(大阪)は病氣のため京都で靜養中との

事、御全快を祈る。

▼西田興樂君(不朽洞會員)夫妻は一月廿日有馬に遊ば

れたとの事。

▼福田山雨樓君(不朽洞會員)は公用で下關へ出張、歸

途十八日に本社訪問、路郎主幹と歡談し午後一時の燕で

歸濱された。

▼石曾根民郎君(不朽洞會員)は十一日から十五日まで

寒村で病臥された由。

柳川 十日過ぐ 高島米峯

ねそべつたま、佛おろがみ十日過ぐ

慶 弔

▼山本丹路君(不朽洞會員)は一月廿五日結婚式を挙げ

られたが静岡、修善寺、伊東、熱海、箱根あたりを廻遊

され、二月八日頃やうやく新居に落付かれた由、尙奥村

と改姓された。

▼川柳きやり吟社(東京)では三月號を以て二百號を重



あきらめは軽い吐息の中で燃え 同
 高利貸山羊一匹を襟にまき 長野縣 佐二本千限
 袖丈も身丈も知らぬ嫁がふえ 同
 メガホンの片手ぬく手の慈善鍋 大阪 富本 無煙
 大賣出し武運の旗にせばめられ 同
 脱帽に脊伸びをやめたニュース館 高松 石手 河鹿
 腹が空く用意もありき原稿紙 同
 口紅が揃うて動く温習會 大阪 松倉 白猿
 玩具函鳴らぬラツバも遺品なり 同
 節約の訓辭する手の金指輪 石川縣 勝山しとし
 アウンサー日本中へ咳をする 同
 哀れにもさけき母のいびきなる 松本 神谷 正司
 勢力の捕り虜よ燕尾服つまく 同
 地位名譽何にも無いが男の子 愛媛縣 高月 透月
 ほめられて遺族の涙又新た 同
 かくて又いつか逢ふ日の待合所 松江 白石紫薇花
 古本屋表紙叩いて客に出し 同
 勝つて来る意氣萬歳ミ手を擴げ 大阪 阿萬 萬的
 棒切は腰へさすもの男の子 同
 膝寫版刷つて給仕に笑はれる 釜山 越智伽藍堂
 斷りを女房氣強く言つてのけ 同

山里のここにも出征幟あり 大阪 田中 風葉
 信仰を説かれて吞んだ茶の滋味 同
 眼前の金に男の價値づけり 松本 名越 新華
 片々ミ雪は思案の日をつくり 同
 不人情になれて誰が減つてのき 大阪 野本 吞水
 募集札都會に女足りぬらし 同
 トラツクは喫茶に近く置きざられ 尼崎 山田南邊路
 たまさかに妻ミ酌む酒小正月 同
 屋台店初荷の客へあわてたり 大阪 岩橋 双虎
 珍しい同志が會ふて乗り過し 同
 女人だミ云はぬばかりの髪を結び 大阪 松永 幸葉
 日本の突撃命いらぬなり 九鬼 馬場 浪二
 出航のドラが淋しい妻ミなり 大阪 田中 楠美
 通勤で乗るバスながら春霞 岡山 半田 春二
 ハンドルを自慢ではなし人をはね 大阪 中西 柳陽
 甘い好き血をねぶつたやうに空け 奈良 山上 山
 寒行のよつたり氷踏んで行き 大阪 森本 秋子
 吞めるだけ吞んで貰つた三ヶ日 大阪 藤宮 宮岡 公子
 犬抱げばぬくみに孤獨つきあける 静岡 乾 幸子
 宴會の小僧お國の唄でもて 東京 風間 花盈
 につこりミ笑顔を見せる勘定日 大阪 馬越 華蝶
 賽錢のミミかぬまゝで誓つて居 尼崎 飯尾寄與史

▼村松夢裡君(不朽洞會員)の御母堂津宇刀自が二月七日突然永眠された。孝養厚き君の心中をお察し申上げる告別式には路郎主幹霞乃女史をはじめ不朽洞會の古參橋本緑雨、永田里十九、須崎豆秋、西いわをの諸君が參列された。

▼畑田炭車君(大阪)は二月十八日突然に永眠された炭車君は川雜により柳道に遊ばされてゐた(畑田よし江君の父君)謹んで冥福を祈る。釋觀應著台。

轉居

▼奥村丹路君は大阪市西區江戶堀下通二丁目十三へ。
 ▼矢野虻の鷹君は松山市南柳井町五九へ。
 ▼小西小仁翁君は京都市上京區鴨深泥松壽山へ。
 ▼高鷲亞鈍君は大阪市西區奧美町一〇番地へ。

戦地より 後藤 檢次

山に明け山に暮れたり弾丸の音
 茶毘の火に照らし出された新戰場
 部隊長胸まで沈み先に立ち
 一本の煙草も丸く吸ひ廻し
 山肌は裂けて血潮に染まりたり
 四方山の手柄話に焚く生木

正誤

▼松本文太君は金澤市陸軍病院第二號室へ。
 ▼一月號十九頁上段沐天氏稿の第一行目京都は東都の誤り。
 ▼同じく十頁廣告の池田司管は可管の誤。

其他

▼本社客員沖野岩三郎君(東京)は恒星社から「日本神社考——日本宗教史の讀み方——」を公にされた。

社告

▼川柳雜誌誌岡町支部の事務所は大阪市港區八條通二丁目丸尾潮花君方に變更した。



「武玉川三篇」

研究」を読む

頼原退藏

現在發行されて居る柳誌の数はかなり多いが、古句研究若しくは史的研究の爲に頁を割いて居るものは、極めて寥々たる有様のやうである。その中に本誌の武玉川研究が數年來繼續されて居る事は、何と云つても注目すべき事にちがひない。しかも研究者がいろいろも作家として、又研究家として斯界の元老である事は、更にその價値を重からしめて居る。これを現時柳壇の一異彩と稱して可なりである。希くはすべての柳誌がこれに倣つて、少くも史的な研究への關心を示すべき若干の頁を割いてくれたらと思ふ。

他の研究に對して第三者は無責任に言を挿んではならない。これは學問上の徳義である。しかし今私がこゝに記すのは、特に自家の説を出張しようとする爲ではない。勿論あへて諸家の説に異を樹てようとするものでもない。たゞ病閑些か氣づいた事をもをかきつけた讀後感にすぎぬ。もし研究諸家並に讀者に對して、いくらかでも參考となれば望外の幸である。

(124) たいこが顔にすり付る 伽羅

伽羅を金の隠語とし、又總じて物の上等なものの意に用ひることは、享保以前の小説、淨瑠璃に散見するが、武玉川時代にはさうした用例はないと思ふ。加之「顔にすり付る」だから、やはり東魚氏の原解に賛したい。

(145) 生なから何にあかれて常念佛

「あかれて」は他からでなく、自らこの世に倦いての意であらう。さらば死にもせて、常念佛に目を送る人の境界である。

川柳評釋百句

氣違ひが私の云ひたいことを云ふ

閑生

常識圏内に住んでゐることが果して幸福か。私たちはホントに考へさせられることが多い。云ひたいことを云つてゐるやうな氣違ひを前にしては殊にそう思ふ。

定期の切れた申出長男長女次女

青兒

「おツ母さん僕定期が切れたよ」「わたしもよ」「アラわたしもよ」さ次ぎ次ぎに手が出る。その母、藁口をのぞいて「定期のお金ならお父さんからおもらひなさい」

四枚一組 田舎娘の春姿

おさむ

イヤに光つたフォート、しかもテーブルの横に固くなつた七分身が想像される。もう少し瘦せて撮りたいのが娘さんたちの共通のなやみか。

人一人生む家白く明けかかり

三太郎

緊張し切つたザワメキが一家を包んでゐるが、夜が白らむにつれてそれが歡喜の聲と變つてゐた。男か女か。詮索の限りでない。

お父さんが病氣ごこかで遊んで來

雅幽

會社を休んでお父さんは眠り續けてゐる。病狀はよくないらしい。みんなは足音をぬすんで歩いた。お父さんのネクタイにブラ下がれない子ごもには元氣がなかつた。

(II) 麻生路郎

涎掛してもやりたいのろけやう

淺女

のろけも發表慾の一つだが、聞かされるのはたまらない。さういふ顔付きで聞いてやるのも面白いものですよ。

仕舞風呂一本足がごんで來る

大門

表現は滑稽だが内容には涙がある。特に仕舞風呂をねらつてゐるころに。

裝飾になるさは悲し苦心の著

文庫

堂々たる書棚。堆かき書物。主人はいつも不在勝。

男みなモシヤくくご悼みけり

沐天

弔するも心そこにあらざればなり、多くはお得意先なるが故なり。名譽職の弔辭も又型の如く悼む。自他それでよし。こは悲慘なる滑稽也。

何もかも騰り淋しい皿の數

喜山

食費を削る夫婦の溜息だ。

皿の數を云々したてて卑しむなけれ。

むかしむかし稼げば樂になりしごか

豆秋

中商工業者の悲鳴、サラリーマンの憂鬱、みな一つに茲に存すだ。瘦馬を憐れむ。

(148) 新造のわづかな願をかけなかし

かけながしは遣りつ放しこいふ程の意。願が叶つたからと言つて報賽もせぬこいふ省二氏説の通りであるが、たゞかけを掛詞に使つたのが多少の山であらう。

(151) 入知恵に口の揃はぬ戀衣

戀衣の衣は成程贅疣に近いが「揃ふ」こ幾分縁をもたせたのであらう。

(162) 明後日かるく請合ふ水淺黄

事を手軽くすまます事を「ざつこ浅黄に」こいふのは、江戸時代の常套語になつてゐる。あつさり染上るものだからである。軽く請合ふ所以。

(175) 紅紙燭夫から先は御意次第

省二氏のあけられた古句もさうであるが

いさみこそすれ

子を思ふ闇の晴れ行く紅粉紙燭

(飛鳥山)

一番に足のうら見る紅紙燭

(名付親)

等の例が皆瘡痂に關する事らしい。それで「御意次第」もほゞ東魚氏説のやうな意に解してよいのであらう。

(179) 一盛り二人の親を淋しかり

「一盛り」は「もこより若木の「トさかり」(通人の寢言)

「けに若き一さかり」(自惚鏡)等の常套的な文句が示す如く青年時代の血氣壯んなのをいふ。

新そばに小判を崩す一トさかり

(柳多留初)

一さかり身になる貌へ遠さかり

(同上)

手拭に〇〇〇〇出来る一トさかり

(同上)

こむらひに行くも嬉しい一トさかり

(同上)

地女をわらぐつこ見る一トさかり

(同上)

一トさかりたいこのこさ奇なりこす

(同十二)

一さかりちよきにて海をわたす也

(同十五)

等、川柳にはかなり盛んに出て来る。句意は省二氏説の如

本復をして辛辣な口をきき

路郎

「死んで欲しかつたでせう。死ななくてお氣の毒様でした」こいふ姑さんに長生きされたら、それこそ災難。

みな様の食堂にけふ休まれる

三巴

オイ、何がみな様の食堂だ。乍勝手本日休業の札が莫迦に癪に觸はつたらしい。

本心を世間話にして歸り

鮎美

世間話にした位で感じるもんですか。心臓よ、強くなれ。

く、兩親の愛なき物足らぬのである。

(184) 水に寄るわか黒髪もニツ折

ニツ折こいふ髪の結び方はつきりしないが、三ツ折から類推するに、巻曲こ刷毛先を同じ長さにしてニツに折つた

結び方であらう。遊女の結つた例も見えるが(二代男・風流夢

浮橋)多くは若衆(男色大鑑・男色寄書羽織・娘容氣禁短氣等)の

結つた髪の風で、又後家もこの髪に結ぶ事があつた(優源平歌

袋・御所櫻堀川夜討)なほ『傾城情史』(天保三年)に「髪ハ俠客風

髮鬘三脚蛇頭」こあるのは、すつこ後世の男の髪の風で、八

文字合本なごに散見するニツ折は異なるのではないかと思

ふ。こにかく『武玉川』時代であれば、若衆若しくは後家の

亦こ見るべきである。だがそれでもなほ句意はつきりしな

い。たゞ「我が黒髪も」こいふ述懐めいた口吻から察するこ

夫に別れてニツ折の髪の結びかへた若後家が、水に映つた自

分の姿に對しての情ではなからうか。「水に寄る」はなほ後考

を俟つ。

かなしみ多く夫人は歌をよみならひ

丹路

下手な怪氣はしないこ。業平の夫人ではないが、夜半にやひり君の越ゆらん例もあるこだ。世の夫人達よ歌を詠め。

借物でないは白足袋ばかりなり

路生

羽織袴は勿論のこ、時が合つたで帽子も借りる。たばこぼんつんぼの前に一つあり

かほる

靜に餘生を送る人か。何處かにユーモラスが漂ふ。一人るて何をつぶやくかは眞盆のみが知る。

(191) 礫のやうな法の返答

秋の屋氏御説「禪僧の問答で突然に難問を出すのが、さながら礫を擲つやうだ」こいふのを、「禪僧の問答で、突然の難問に答へるのが、さながら礫を擲つやうだ」こ言ひかへた

い。

(209) 髮際に無理の礎る墨染

「髮際はカギハミ讀む。讀み方さへ判れば用例は必要もないから畧する。

(210) おもひ請付くお物師の針

お物師は元來高貴の家に仕へる裁縫師を言つたものにはな

がひないが、江戸時代には普通の町人の家に傭はれた所謂お

針や針妙の事も言つて居る。用例は枚擧に遑がない。むしろ

「お物師」で高貴の裁縫師を想ひ浮ぶべき場合が稀だこ言つ

てよい。そしてこの句のやうな場合、お物師に連想されるの

はやはり戀味である。「おもひ」は當然戀の思ひこ解すべきであらう。錆びついた針を、お物師の物思ひの涙でさびついた

こ言つた位の事と思ふ。



川柳塔

路郎選

大阪麻生霞乃

廣告燈よほよほよほよほ文字歩く
可愛がられて足もゆがんだ座り癖
ラブレターの嘘に女神さ書きにけり
めざす所へいつか出るらむ奈良の奥

同橋本緑雨

受付で軽くみられた男也
無口なのが断り役に選ばれる
寒椿温泉宿の膳につき

兵庫縣水谷鮎美

兒の指でつゝかれて居るのさ佛
兒の顔がくもつて見える吸入器
年寄りの釘うつ日をば考へる
マツチの火片頼明き戀なりき

大阪姫田夕鐘

くちばしの青さがこれた入營日
汽船の底の底が震源地だつたさうな
玩具箱返やすこ戦車走り出し
ガソリンカーおしつこしたい兒に困り
硝子一枚外は冬の素顔です
パーマメントあまりに長き眉を引き
令夫人バットが素性さばくなり

名古屋吉田水車

十錢でこんだけ治る艸を買ひ
石垣に生きこし生ける無名草
所在なき女給マツチをみんな折り

大阪府妹尾變人

出迎への冷たいお手々驛の風
髪染めて我の若さを信じ切り
集金をここはりうがひしてゐたり
くすりびん父の病氣に子はすわり

大阪須崎豆秋

春の雪、みかんの皮を捨てに出る
ようかんをいただいてるさ地震かな
流連を髪結さんに覗かれる
スペースシャル、ルームを女さけしみぬ
パーラーに春の温度の花開き
拾ひ屋も上海だより唱ひつゝ、
靴下についたる猫の毛をむしり

松本石曾根民郎

狂人の背に陽はまる冬木立
食慾をきらし狂人灯に對す
月の庭出で、狂人唇乾く

前號 反響

飛躍號の反響の豫想
外に大きく編輯局では
一便毎に感激し、一層
の努力を誓ひ御好意に
酬ひるため反響の一部
を發表する事にした。
★

▼「川柳雜誌」の新年號到着その盛觀まづ逐年の御發展を
慶賀仕り候 (東京・高島米峰)

▼思ひきつた、底光りのする堂々内外充實改装の本春第
一號「ウーム」と唸り申候、例へば應永備前の古名刀に
輝く新外装の軍刀の如く「美」「威」「味」の三魅力具備
快哉く候

▼「黙アまつて出しても凄く日本刀」(松山・前田五健)
▼アツと驚ろいた「川柳雜誌」I
非常にうれしいです (東京・宮尾しげを)

▼「川柳雜誌」新年號素晴らしいですなア。菊倍版には柳友
みんな度臍を抜かれたことと思ひます。
(青森・小林不浪人)

▼拜啓 川雜一月號拜受菊倍版の豪華さに感嘆近來の雜
誌中の壓巻と思ひます出版報國が報道されながら最近と
んと見るべき書なき折柄川雜十五卷一月號が堂々とあの
誌型あの内容でデビューした事は本當に嬉しく衷心より
御同慶に堪へません、戦時下に於て一番欲せられたもの
は讀物なのでせう、その點此の擧は文化史的に申しても
意義深いこと、拜察申します。(今治・石崎柳石)

▼お便り及び一月號難有く拜見致しました、この型こそ
川雜本來の使命の型です、新味があります、月並を脱し
てゐます、私としては断然この型の御繼續がのぞましく
存じます。(仁川・池田可寄)

日本柳壇百人撰 (落植追加)

青森市 小林不浪人
献金のこゝで政争忘れられ

▼啓、新春特輯號第二版には一寸驚きました。先生の
御苦心のほども拜察され感激に堪えませぬ
(横濱・福田山雨樓)

大阪後藤青兒

御互ひにマスクはづして口論す
イコールにならぬ暮しに又三十日
蠅舟に親しみのない冬の水
猛犬に御注意開けて見れば居す
踏むがなご思へば逃ける鳩の群

桃山病院へ青兒氏を見舞ふ

受付も感冒らしい咳一つ
支那酒を令嬢一つ召上り
子の寝顔段々ませて女學校
向學心押へる親の唾を呑み

大阪府宮岡白峯

儲からぬ話仲居に否定され
五人の手一度に上げてゐるタクシー
佛檀の花青々として眞晝
日記帳酔へない酒の味さなり

大阪加藤ライト

満員へ淡島様はこぼはられ
名刺屋に斷はられたる大晦日
底冷えへ利子で食へない身なりけり
月賦また月賦の後を追うて來る

大阪正本水客

網棚へ蜜柑が一つ忘れられ
一番でたつ話する湯があふれ
息をするたびに帯止光る也

阿蘇山

草千里霧は重たき色さなり
豊中黒川紫香
眼帯のされたまぶしい朝の陽
品皮へ下る二人は金のこご

自轉車も押さねばならぬ坂へ來る
大阪丸尾潮花

もう一度せがんで欲しい子の楸

南天の一つ子供の手に遊び
酒吞まぬ妻へも屠蘇が廻つて來

朝鮮池田可宵

存の丸い父の面影想ふまい
芝居好き泣きすぎそれに陰險だ
情には生きぬ人との取組み
集金の鞆枕に女ご居

兵庫縣長崎柳秀

藏ざらへされご損まぜして賣らす
南京を見ずに我子は國柱
重爆機天に代りて不義を打つ
交又點馬子は必死の綱をひき

今治石崎柳石

アベックの歸る夜道は手をつなぎ
新婚ののさかな氣持温泉が溢れ
上かん屋お客お客へちがう世辭

今治石崎柳石

まかせ切る心で子供風呂に寝る
心臓の強さにあらず花鉄
空征きて君殉忠の華ご散る

長野縣金井有爲郎

兒は病氣おもちやのいらぬ日のうれひ
アドバルーン地球をのがれたいと言ふ
猫が來てわらふますしき勝手元
戀の點滅かひひり居のたばこの火

今治渡邊曉童

初詣子を真中にした歩調
砂文字馬鹿さいふ字が書き易し
集金の蝶ネクタイがしなびたり

愛媛縣今川椋影

濕布して猶も妓の厚化粧
萬物の靈長にして此の差別
雜巾の半さうせは拭くごころ

▼「川柳雜誌」一月號拜受、有難く御禮申上げます、菊倍判といふ、詩文誌として未曾有の擴大誌面といひ、内容の充實發展といひ實に皇軍の南北支に於ける飛躍にも比すべきものと心から慶賀申上げます。川柳人協會結成進展と共にこの誌面の強化擴充を聲を大にして御祝申します、御健闘を祈ります(寶塚・寺川 信)

▼「川柳雜誌」菊倍判にて一大革新、驚異の進出と敬意を表します、關係してゐる柳誌がこんなに立派なものであることを私はこころたのもしいことです(松本市・石曾根民郎)

▼昨日會社附近へ用事がありまして寄つて見ましたら新年號が届けて頂いて居りましたので嬉しく持ち歸りました、随分立派になりましたですね、父も驚いて居りました(大阪・畑田よし江)

田舎は情緒的である

福田山雨樓

子供のいき遊んだ山や川をその土地を踏み乍ら見てゐるご何だかしら眼頭が熱くなる、車を挽いてゐた鬚面に幼き頃の面影を認めて輝さん？ご呼びかけるごやつぱりさうであつた。二十年振りである。親しかつた友達や近親に會つて村の様子を聞くご、目まぐるしい變遷振りに目を見張るごが餘りに多かつた。耳を疑ふごも少しなかつた。「眞さんは父親を失つたが十八年目に初めて男の子を儲けてよろこんでゐる」ご云ふのもある。母の墓が新らしく出來上つた。見るごまだ健在である父の戒名も右側に並べて彫り込んであるのには驚いた。

▼川柳一月號にはさすがの小生も一寸ごきもを抜かれまして(東京・阿部佐保蘭)

▼まづ第一に型の新しいのに、さすがはの念を深くしました、慾をいへば製本が少し完全にならぬでせうか、紙質をおとすとよいかも知れませんが

▼祝健康擴大川柳の十五年(愛知縣犬山・山田有町)
▼一同張り切つてゐます、正月號見事な出來榮えでした(廣島・濱田久米雄)

川柳・案内

六號活字十四字詰三行
金五十錢(但し前金
切手代用可)句會案内
柳書廣告その他

川柳を作る人愛好する人の必讀誌
毎月一日發行 一部廿錢 送料一錢

川柳俱樂部

東京牛込區揚場町八川柳俱樂部社

東海の川柳草薙

代表誌
一部一〇錢 一年一圓(郵税共)
名古屋市南區八熊町
寺田一五〇

川柳きやり

菊判每號七十數頁
毎月一日發行 一部廿五錢
東京豊島區高田本町二ノ一四
六八 川柳きやり吟社

京

一部十錢 一年一圓
京都市西木屋町四條下ル
發行所 京都川柳社

月刊 みちのく

一部十五錢 一年一圓五十錢
青森縣黒石町 川柳みちのく社

懸賞川柳

課題「咲く」三月十日
「相手」四月十日
用紙は官製ハガキ(化粧柳壇と
明記の事) 選者麻生路郎氏
秀逸數句に薄謝を呈す
宛先 大阪府西成區玉出本通
三ノ三六 麻生路郎氏方
化粧新聞社柳壇へ

合本特賣

川柳雜誌の合本自第一卷至
第十二卷 各金壹圓五十錢
第十三卷及十四卷 金參圓
送料 大阪市内 一冊六錢
市外 一冊二七錢
御申込は前金で川柳雜誌社へ

川・雜・句・箋

「川柳雜誌」への
投句は楕形の美し
い投句用箋をお用
ひ下さい
句の書き心地もよ
いし、選者が選句
されるのにも、便
利なので特におす
くめいたします
送料は本社で負擔
いたします
八十枚綴
一冊 金十五錢
同 二冊 金廿五錢
御申込は
川柳雜誌社へ
切手代用も可

寒中御伺

松島みどり葉

石川縣河北郡
津幡町加賀爪

寒中御伺

麻生路郎

「大正川柳」第五一號及び第五
八號相當の代價にて譲受けたし
川柳雜誌社内 B B 生

「後の葉柳」を頒つ楕形四頁三
部十錢、切手代用二錢五枚
川柳雜誌社宛

麻生路郎編著・柴舟漫畫

累卵の遊び

四六版一六〇頁・函入・覆書三十二葉
川柳の妙味を骨を折らずに味つて貰ふつもりで噺んで碎いて摺り
餌にしたのが累卵の遊びであるとは著者の序文の一節である
定價 壹圓
特價 八拾錢
送料 九錢
發行所 玉出本通三 不 朽 洞
振替大阪三〇三九二

★社員を募る！

二十才より三十才までの方。
男女を問ひません。
採用 二名。
履歴書(寫真と共に)郵送の事。
面會日追つて通知致します。
手當其他委細面談の上にて。
大阪府西區筑前パン電停前
昭和ビル一號室

川柳雜誌社事務所

全國百貨店、有名化粧用品店
薬店、小間物店にあり



美髪は
紳士道!

御使用後ごても
スマートな灰皿
になる新案容器!

フケ・カユミを止め白髪・若禿を防ぎ
明らかな青年美を創る伊豆椿ポマード
頭髮のホルモン劑 (コレステロール配合)

伊豆椿 灰皿ポマード

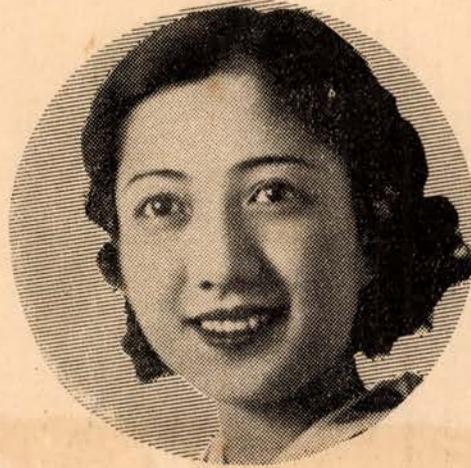
植物性 十五錢



伊豆椿香油本舗
大槻彩芳園

にきびとりに

美^び顏^ん水^{すゐ}



美容薬として

この薬は美容薬としても大へんよく入浴後や洗面後等にお用ひになるととても爽快で、ニキビ吹出物を防ぐのは勿論、キメが細かにツヤを増しお顔がスツキリと美しくなるので美容薬としても盛んに愛用せられてゐます。

蚤蚊南京虫其の他毒虫でカユイ時にもとても便利な薬!

ニキビ吹出物に非常によく効きますので大評判の薬です。ぜひお勵めしたい薬!

ニキビ

吹	に	此
出	ぜ	薬
物	と	を

化粧用 美顏水

ア	粧	の
ブ	下	お
ラ	に	化
顏	!	